

英語科・外国語活動を中心とした提言（若手 保彦 先生）

はじめに

令和4年度は、教科指導員として小学校2校、中学校2校の計4校を訪問、視察する機会をいただいた。私の話は「提言」と言えるようなものではないが、せっかくの機会なので、訪問を通じて感じたこと、また今後の取組の方向性について、英語教育の立場から述べさせていただく。

学校訪問全体に関する感想

こちらは毎年同じであるが、最も印象に残っているのは、訪問したどの学校においても、廊下で会う児童生徒が元気なあいさつをしてくれること、またそれが自然にできていることである。先生方の日々の粘り強い指導の成果であると思う。

最初の時間に行われる学校経営説明では、各学校で特色ある目標が定められ、目標の実現に向け組織として一体感を持って取り組んでいる印象を受けた。一般授業参観についても、多くの先生方が工夫を凝らし、児童生徒の関心を惹く授業が展開されていた。教室に貼られた掲示物からも、学習への意識を少しでも高めようとする努力の跡が感じられた。

特定授業（英語および外国語活動）に関する感想

特定授業では、どの授業においても、児童生徒と教師、児童生徒同士のコミュニケーションが普段から円滑に行われている様子が窺え、児童生徒が集中して教師の話を聞こうとする姿勢や、活動に積極的に取り組む姿勢が印象に残った。また題材や活動の導入、活動で使うワークシート等からも、授業担当者の様々な工夫や努力が感じられた。

今年訪問させていただいた中学校の英語授業では、両校ともALTとチームを組んで指導する体制がとられており、生徒がグループで活動しているところにALTが入って関連する質問を行ったり、英語表現に関するフィードバックを与えたりするなど、生徒の活動をサポートする場面が見られた。また、ALTに秋田県内を旅行する上で有益な情報を提供したり、秋田での冬の生活に関してアドバイスをするなど、ALTのニーズをうまく活用した活動の目標が設定されていた。このような目標を設定することで、生徒は意欲的に取り組もうとする動機を持つことができる。また、ALTが情報やアドバイスを理解する様子を見て、「相手に対して英語で情報を伝えることができた」という達成感を感じることができるだけでなく、活動後にALTに感謝される体験をすることで、他者に貢献できたという自己有用感を持つことにもつながる。

なお、外国語科の学習指導要領では「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」という文言が新たに加わっているが、これはコミュニケーションを行う際に、目的や場面、状況、また外国語やその背景にある文化を理解して相手に配慮することの重要性を示したものである。このことが示唆するのは、「ALT＝外国人」と単純化してとらえて情報やアドバイスを伝えるのではなく、「ALT＝異なる文化および体験、好みを持つ一人の人間」としてとらえ、相手の持つ文化に加えて、相手のこれまでの体験や好みを理解し、それを踏まえた情報やアドバイスをを行うことの必要性である。参観した英語授業においては、生徒が活動を行う前に、ALTに自身の知りたいこと（例：秋田の冬について知りたい）に関してプレゼンを

してもらったり、生徒がALTに好みについて質問する機会を与えていたが、こういった段階を設けることで、より有用な情報やアドバイスを提供することにもつながる。今後も継続して「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる」ような活動のデザインを行っていただきたい。

一方、今後の課題としては、言語表現について検討する時間の確保が挙げられる。コミュニケーション活動において生徒に身近な場面を設定すれば、「きりたんぼ」や「しょつつる」、「かまくら」など、必然的に「秋田」の文化に関連する語彙が登場する。生徒が発表を行う際は、これらを英訳せずにそのまま「きりたんぼ」「しょつつる」として使用することが多いが、実際のコミュニケーションにおいては、そのまま使っても相手が理解できない場合もある。発表後の時間等で、こういう語句をいくつか取り上げ、英語での表現方法を検討する活動を行うのはどうか。その際、辞書やネットで提示される表現が難しければ、より簡単な英語の説明を生徒に作らせ、ALTに通じるかどうか確認してもらいたい。ALTの活用につながるとともに、基本語の意味の範囲について学ぶ重要な機会になると考えられる。基本語の駆使は、特に語彙が限られている英語を母国語として話さない生徒が外国語でコミュニケーションを行う際には必須である。

小学校外国語に関しては、英語の専科教員による授業と、専科ではない教員の授業を参観したが、英語の専科ではない教員もできるだけ英語で授業を進めようと努力する姿勢、また両校の授業において、児童が積極的に活動に取り組む姿勢が印象に残った。また、ALTに対して日本語に関する質問をしたり、“What do you want?”と“What would you like?”の表現の比較を行ったりするなど、言葉に対する関心を高める機会を設けている点も素晴らしかった。ICT 機器と黒板の使い分けも見事で、保存の点で優れている ICT と、予定にない児童の発言に対して柔軟に、即時に対応できる黒板、という両者の特性を意識できていると感じた。

課題としては、外国語の授業で取り上げる文化の扱いが挙げられる。外国語を学習する際、題材に関連して、自国や他国の文化について触れる機会が多い。異文化理解というと、自国の文化との違いに目が向きがちだが、根底にはつながっている部分もある。例えば「すし」は日本独自の食べ物と考えられているが、それは形状の点での独自性であって、「すし」はもともと東南アジアの外来の魚の加工法から生まれたという説がある。またイギリスの代表的な飲み物である紅茶も、その発祥は烏龍茶で有名な中国の福建省にあるという説が有力である。緑茶と烏龍茶と紅茶の関係であるが、茶葉を発酵させなければ緑茶、少しだけ発酵させれば烏龍茶、発酵させれば紅茶に変化する。授業で tea という単語を扱う際には、そういうつながりについても伝えることができれば、自国の文化と他国の文化にさらに興味を持つきっかけになるのではないか。技能の習熟も重要ではあるが、小学校段階では、言葉や文化に興味・関心を持たせる種を折にふれて蒔いておくことも技能の習熟と同じくらい、もしくはそれ以上に大切であると個人的には考える。

なお、食べ物や衣服のような「目に見える文化」はできれば家庭科などの他教科で扱い、外国語科では「目に見えない・見えにくい」文化について考える余裕を持てるようになればさらに理想的である。その意味でも教科間の連携が望まれる。